

「花芯」 ★★★

2016 (平成28) 年8月11日鑑

賞<テアトル梅田>

監督：安藤尋

原作：瀬戸内寂聴『花芯』（講談社文庫刊）

吉川園子（雨宮園子）／村川絵梨

雨宮清彦（園子の夫）／林遣都

越智泰範（雨宮の上司、園子の恋人）／安藤政信

古川蓉子（園子の妹）／藤本泉

正田（アコーディオンを弾く男）／落合モトキ

畑中／奥野瑛太

北林未亡人（下宿の大家）／毬谷友子

2016年・日本映画・95分

配給／クロックワークス

◆1922年生まれ作家にして僧侶である瀬戸内寂聴さんが、若き日の恋愛体験を小説にした『夏の終り』は1963年に女流文学賞を受賞し、彼女の作家としての地位を確立した作品。これを、熊切和嘉監督が映画化した『夏の終り』（12年）は、主演の満島ひかりがいつも若くてきれいなため、どの物語が何歳の時の出来事かがわかりにくいという欠点もあったが、いい映画だった（『シネマルーム31』83頁参照）。

◆しかして、『夏の終り』の5年前である1957年10月に、新進女流作家、瀬戸内晴美として「新潮」に発表し、「新潮同人雑誌賞」を受賞した『花芯』が、今映画に。監督は安藤尋、主演は村川絵梨だ。村川絵梨は、NHKの朝ドラ『風のハルカ』等に出演していた女優だそうだが、私は全然知らなかった。予告編で何度も観た限りでは、それなりの顔と容姿だし、セックスシーンも体当たりで演じているように思えたが、さてその出来は？

◆「男は脳で考え、女は子宮で考える。」とよく言われるが、それってホント？ちなみに、私の持っている中国語の電子辞書では、「芯(xin)」は、①い草(灯芯草)の芯：茎の中身の髄。〔灯deng草〕は通称、②ランプ・あんどんなどの芯：い草の芯や綿糸などで作る。〔灯芯〕灯心、③物の芯。内部。〔(鉛) 笔芯〕〔笔心〕鉛筆の芯。〔机芯〕機器の内部、という意味で、日本語の「しん」も中国の「xin」も同じらしい。他方、「花心(かしん)(huaxin)」は①〈口〉花のずい：〔花蕊〕の俗称、②浮気心(をおこす)、移り気(がでる)、多情(である)：多く男性についていう、という意味になる。さらに、「花芯」は中国語では「子宮」という意味になるそうだからビックリ。

見合い結婚した夫、雨宮清彦(林遣都)がおり、息子まで産んでいるにもかかわらず、夫の上司である越智泰範(安藤政信)に恋をするという設定そのものが、1950年代の日本では、センセーショナルだったのは当然。映画の中で園子は、越智から、「きみという女は、からだじゅうのホックが外れている感じだ」と称されていたが、さて、そんな園子を女優・村川絵梨はいかに演じているの？

ちなみに、映画の中では「子宮」という露骨な言葉は出てこないが、小説では「子宮」という言葉がたくさん出てきたため、瀬戸内晴美は「子宮作家」とレッテルをはられ、長く文壇的沈黙を余儀なくされたそうだ。なるほど、なるほど・・・。

◆日本が戦争に負けた後、園子の口から、妹の蓉子(藤本泉)に対して、「今までお国のために生きてきた私たちは、これから何のために生きればいいのか」という問いかけがなされるが、もちろん、それに対する答えはなし。まともそうな妹(?)と違って、戦争中からかなり白けきった感じ(?)の長女園子だったが、それでも許嫁としての関係が続いていた男、雨宮とそれなりに見合いをして結婚し、それなりにセックスをして、子供にも恵まれ、それなりの新婚生活、家庭生活を営んでいた。しかし、夫には分からずとも、観客には、夫への愛情の無さや、家庭生活、夫婦生活における園子の白けぶりは明らかだ。

すると、今なら「性格の不一致」で即離婚となるところだが、1950～60年代という時代では、それは到底ムリ。しかし、園子がアコーディオンを弾いている男、正田(落合モトキ)やイケメンで何とも魅力的な雨宮の上司、越智に出会うと・・・。

◆都市問題をライフワークとしている私は、1960年代以降の「持ち家政策」が日本の高度経済成長と都市政策の進展の大きな原動力になったことがわかるが、本作で描かれる京都はまだまだ「下宿」の時代。そんな時代状況下、雨宮夫婦も越智も下宿していたが、その大家さんが未亡人の北林(毬谷友子)だ。雨宮の話では、40歳近い越智が今も独身でいるのは、その未亡人と「ねんごろな関係」にあるからだそうだが、いくらなんでもまさか・・・。そう思っていると、ある日、園子がのぞき見たシーンでは・・・？

◆今なら至る所にラブホテルが完備しているから、浮気も不倫も手っ取り早く可能だが、あの当時は？まして下宿では？そんな時代状況下、越智に対して生まれてはじめての恋心を感じ取った園子の行動は？そこらまでは男の私も分かるのだが、園子の中に次第に湧き起こってきた「子宮の叫び」となると、さっぱり理解不能だ。さて、それを女優、村川絵梨はいかに表現しているの？

ちなみに、「白け女優」としては桃井かおりが日本の代表(?)だが、1951年生まれながら背中の中をコマーシャルで披露している彼女が若ければ、彼女こそ本作の園子役にピッタリ？また、去る6月6日に観た『後妻業の女』で大竹しのぶは年齢も役柄もいかにもピッタリの素晴らしい演技を見せていたが、デビュー作たる『青春の門』(75年)で牧織江役を見事に演じた若き日の大竹しのぶが本作の園子役をやれば、きっと素晴らしかったのでは・・・？